

# 市民の意見

発行：市民の意見30の会・東京

NO.101  
2007/4/1



住所：〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-29-12-305 TEL/FAX:03-3423-0185 郵便振替：00120-9-359506  
ホームページ：http://www1.jca.apc.org/iken30 eメール：iken30@mwb.biglobe.ne.jp  
\*『ニュース』は隔月刊/購読料・送料とも年2500円、一部400円、65歳以上および身障者の方は年2000円

## 目次

### ●世界の潮流と日米関係

新自由主義とネオコンの破綻

北沢洋子

日米軍事一体化と沖繩 新崎盛暉さんにきく

8

〔資料〕新アーミテージレポート付録

11

連載・自衛隊の実態その⑧ 自衛官の自殺問題

T生

13

●憲法9条を泣かすな！3・10講演会から

斎藤貴男

14

格差社会・構造改革と戦争メカニズム

なだいなだ

17

●NHK番組改ざん訴訟判決をめぐって

諸橋泰樹

20

三大紙は判決をどう報道したか (1)

諸橋泰樹

22

〔資料〕判決をめぐる三大紙の記事分析

諸橋泰樹

24

原告 西野瑠美子さんにきく

諸橋泰樹

26

●運動の現場から

太田修平

26

真のセイフティネットをめざして

太田修平

26



石井芳雄作「花」(無言館所蔵 作者の経歴は3ページ)

どんなに危険のせまった戦場でも、興味のある風景や光景をみれば絵にしたいくなる。芳雄もそうだった。中国山東省からの三百通におよぶ絵ハガキに日本兵の姿や戦闘を匂わせる場面を描いた絵なんて一枚もなかった。「薄暗い民家の中で、美しい弦の音が聞こえました。何もかも殺風景な土地で、美しい音をきくと、何かよけい甘くせつなくなる気分です」芳雄はほんとうに銃をもって敵と戦って死んでいったのだろうか。

(窪島誠一郎「無言館を訪ねて 戦没画学生「祈りの絵」第二集(講談社)より)

### ●文化

詩 「骨のうたう」

竹内浩三

2

目標達成まであと一歩 市民意見広告運動事務局

北原博子

28

わだつみのこえ記念館へようこそ

永野 仁

30

表紙の絵の作者石井芳雄について

まつだたえこ

3

マンガ 「ふしぎの国のありか」

本野義雄

31

映画紹介 ドキュメンタリー「ひめゆり」

島川雅史

32

●その他 読者懇談会のページ 「政治は軍事に勝る」

島川雅史

33

読者のおたより

島川雅史

35

インフォメーション

島川雅史

36

編集後記/会計報告・会計係より

鷲谷眞理子

36

### ◆題字

◆本号のすべてのカット

横島優子

36

### ☆4月の読者懇談会のご案内☆

講師：山中 恒(前号執筆)「愛国心教育を考える」  
日時：2007年4月13日(金)午後6時半 参加費500円  
場所：たんぼ舎  
(JR水道橋駅下車5分 ダイナミックビル5F  
03-3238-9035 / 32ページの略図参照)

故国の人のよそよそしさや

自分の事務や女のみだしなみが大切に

骨は骨 骨を愛する人もなし

骨は骨として 勲章をもらい

高く崇められ ほまれは高し

なれど 骨はききたかった

絶大な愛情のひびきをききたかった

がらがらどんどんと事務と常識が流れ

故国は発展にいそがしかった

女は化粧にいそがしかった

ああ 戦死やあわれ

兵隊の死ぬるやあわれ

こらえきれないさびしさや

国のため

大君のため

死んでしまいうや

その心や

【解説】 竹内浩三（たけうち・こうぞう）は1921年（大正10年）、三重県宇治山田市（現在の伊勢市）でも有数の呉服店の次男として生まれ、日大専門部（現在の芸術学部）に入学。マンガ、詩、シナリオ、小説を書き、映画監督をころざしたが、1942年（昭和17年）入営、1945年4月、フィリピン・バギオの高地にて戦死。2年後、遺族のもとに届いた白木の箱には遺骨も遺品もなく、彼の名前が書かれた1枚の紙が入っていただけだった。

入営の2ヶ月前に書かれた「骨のうたう」の原作は戦争直後、浩三が出征前から参加していた同人誌『伊勢文学』第8号に初めて掲載された。その後友人によって補作されたものが1960年代に世に紹介され、次第に有名になっていった。1980年には、浩三の故郷伊勢市の朝熊山山頂に「骨のうたう」の一節を刻んだ詩碑が建てられた。「詩碑は戦没者の遺族に支払われた補償金とほぼ同額で建てられたという。もつと奮発して、図書館の敷地に記念碑を建てようという友人たちの声もあったそうだが、これだけは彼女（注・実姉松島こうさん）が譲らなかつた。詩碑建設には『弟の命がこんなに安いのか』という、彼女の怒りが込められていたからだ。それに、あまり立派な墓を作らないでほしいというのは、生前における竹内浩三の希望でもあった。」（稲泉連「ほくもいくさに征くのだけれど」竹内浩三の詩と死」中央公論社）

■参考 竹内浩三全作品集（藤原書店）、小林察編「戦死やあわれ」（岩波現代文庫）



無言館所蔵の表紙絵画の作者

石井芳雄（いしい・よしお）

1913（大正2）年5月1日、東京・八王子の機屋の3人兄妹の長男として生まれる。府立織染学校（現八王子工業高校）卒業後、絵にめざめ、新宿の伊藤茂平研究所に通う。父亡き後、

画家への道をあきらめて20代前半から家業を継ぐ。1943（昭和18）年9月、北支派遣衣三三一部隊日野隊で野戦病院の衛生兵として出征。従軍中、

や弟に数多くの絵葉書を送るが、1945（昭和20）年7月5日、北方へ移動中、結核で戦病死。享年32歳。